

# 禪と共に歩んだ先人

山岡鉄舟 XVII

臨濟禪と接し、その精神性や美意識に感化される事により、自分自身を高め、偉大な功績を残した先人達を紹介するという趣旨で進めていこうというこの項ですが、前回に引き続き、幕末から明治にかけて活躍し、現代の日本のあり様にも大きな影響を与えているといえる「山岡鉄舟」についてお話させていただきたいと思えます。

## 鉄舟、大悟す

明治帝の侍従としての仕事のかたわら、三島の龍澤寺、星定和尚の元への参禅にはげむ鉄舟でしたが、なかなか成果を出せずにいました。十七、八歳の若い頃から二十余年余り禪の探求にいそしんできたものの鉄舟本人としては一進一退と感じられ、自らの修行にも疑問を抱く様にもなっていました。

龍澤寺へ参禅を始めて三年、星定和尚

から「よし」と許しを得ました（悟ったと認められる事）。しかし鉄舟本人は全く納得できませんでした。内心「なんだ、つまらぬ。こんなことでよいなら、三年通つて馬鹿を見た」と辞去して箱根に差しかかると、山の端から富士山が現れました。「はっ」そこで豁然として悟ったのでした。

喜んだ鉄舟は、星定和尚の元へ走って戻りました。和尚はにこにこして「今日はお前が、間違いなく帰つて来るだろうと待っていた」と言いました。

その悟りの心境を鉄舟は

晴れてよし 曇りてもよし 富士の山  
もとの姿はかわらざりけり

と詠みました。

大道を会得した鉄舟は、このあと、天龍寺の滴水和尚、相国寺の独園和尚、円覚寺の洪川和尚らについて仕上げをめざしたのでした。

## 西郷との別れ

大悟する一年前、政争に敗れ、下野し

ていた西郷隆盛を鹿児島まで迎えに行くと明治帝よりおおせつかります。帝は西郷を大層気に入っており、下野してしまつた事をおしんでおられました。西郷と仲の良い鉄舟を遣つて呼び戻そうとしたのでした。鉄舟は無理だと断りましたが、たつての仰せで一人鹿児島へ向かいました。温泉へ来ていた西郷を訪ねて行くと鉄舟を見た西郷は「迎えに来たのか」と聞き「むむ、そうだ」と鉄舟は応えませんでした。あとは西郷も聞かず、鉄舟も話さず、ただ四方山話で飲みあかしたのでした。別れ際、鉄舟は西郷に書を数枚所望します。それならと西郷も鉄舟に所望し、お互いで五、六枚書き別れました。鉄舟も西郷もこれが今生の別れとなる思いがあつたのだらうと思えます。その三年後、明治十年（一八七七）の西南の役で西郷は帰らぬ人となりました。